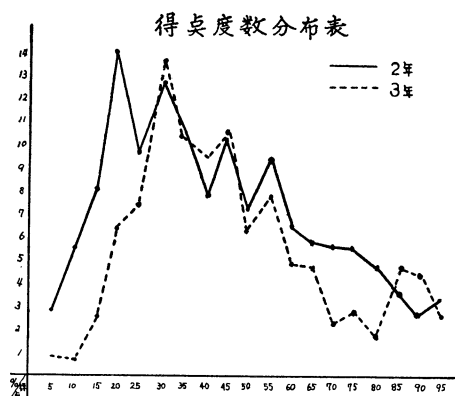


つぎに、時代名などを単にクことばクとして知っているだけでなく、その時代の特徴や歴史の流れの中に占める位置などについての理解を深める指導法の工夫が望まれる。

今後指導にあたって特に工夫が望まれることとして、つぎのようなことがあげられる。

- ア 世界史と日本史との時代的関連をつかませる。
- イ 時代観念をはっきりつかませる。
- ウ 史実を因果的発展的、にとらえて、時代の特色を把握させる。
- エ 史実をぼつぼつと単独に理解するだけでなく、全体の総合的把握する力を養うこと
- オ 学習形態のくふう。

また、具体的教材に応じ、教師自らの研究と、工夫が望まれることではないだろうか。



- ③ 得点度数分布について、2年、3年の個人別得点度数分布状況を見ると、やや低い方え重みがかたよっている。全段階に分布していることから、すぐれた学力をもつもの、劣っているものが相当いることがわかる、今後は得点 25,30に位置する生徒の学力向上を期待したい。

数 学 科

全国中学校一せい学力調査における本県としての調査結果を、誤答分析を通して学習結果を診断し、その指導方法を改善する資料を提供する目的をもってこの報告書を作成したものである。

この一せい学力調査問題は、先般改訂された指導要領の中学校1年、2年の内容を中学校2年、3年の生徒を対象として、調査するためのテスト問題である。

誤答分析の結果より陥り易い種々の問題点を明らかにして、これをつまづきの原因と見なし、このつまづきの原因を除去することが学力向上へのつながる一つの道しるべと考えたわけである。

この報告書の内容としては

〔Ⅰ 概説〕として調査問題の作成方針とねらい、領域毎の平均正答率、および小問毎の正答率をのせて

全般的な考察を行ない。

〔Ⅱ 領域毎の考察〕として、数、式、数量関係、計量、図形の5つの領域にわけて、領域毎に内容の分析、指導法の反省および領域の特殊性などを取り上げ、指導上の参考資料とし。

〔Ⅲ 学年としての考察〕では、第2学年第3年にかけて問題点を解明し、

〔Ⅳ 指導上の問題点〕では、全般的に眺めて、数学科としての問題点を検討したものである。

報告書として、内容的には不備の点もあることと思うが、一目を通すことにより、問題点を把握することができると思われる。

ここでは報告書の一部を取り出して、参考に供したい。

(1) 調査結果の概要

① 県平均点

表 1

	第2学年	第3学年
平均	56.7点	48.7点
期待度	70.0点	60.0点
到達率	81.0%	82.8%

2年 56.7点、3年 48.7点の平均点である。これを全国的な位置づけとして比較検討することが考えられるが、只今のところその発表がないので、本県として自己批判という形で評価してみたい。

この程度の問題では、平均点として、2年70点 3年60点は期待したい。この本県としての期待する値を期待度と考えれば、これにどの程度到達しているかを示す値が到達率である。(表1参照)

このように到達率を求めてみると、2年で81.0% 3年で82.8%と相当期待はづれということになる。

勿論本県としての期待度がどのような位置づけで表わすかによって、到達率は違ってくる。

しかし期待される平均点は、これより低いということは考えられない。なぜなら①2年、3年とも1学年下の指導内容より基本的な問題が提出されていること②全問題4ないし3個の選択肢による解答であること(これはテストにおいて、選択肢による解答は選択肢の数が4個なら、 $\frac{1}{4}$ の確率でわからなくても正答となる可能性があることとなり、100点のうち25点はわからなくても点数を取ることができるという不確実さが加わるため)したがって、表1のような到達率を、もって高める方策として、指導法の改善に力をそぐことが必要であると思われる。

② 領域毎の平均正答率表